

国語科 [国語表現] シラバス [文系選択Ⅰ・Ⅱ]	単位数	2 単位
	担当者	照屋賀代子 大嶺恵梨花
	教科書	教育出版 「国語表現 改訂版」

I 目標

- ・前年度までの学習をもとに、「書くこと」を重視するとともに「話すこと・聞くこと」の学習をバランスよく取り入れ、また「読むこと」の学習にも配慮することによって、適切に表現する力を育成し、すべての学習・社会生活・人間関係を支える言語表現力を養う。
- ・伝え合う力を高め、思考力を伸ばして言語感覚を磨き、すすんで表現することによって社会生活を充実させる態度を育てる。

II 授業の内容と学習法

- ・文章（特に小論文）を書くことについて、その基礎から完成までを、文法・構成・技法・推敲はもちろん、主題選定や課題対応、意見構築、思考方法、資料活用などに関して学習し、繰り返し実践することで確実に定着させる。
- ・ディベートやプレゼンテーションについて、準備・方法・テクニックを学習し、実践を通して確実に定着させる。
- ・メディアや情報と現代人とのかわりについて学習し、自分の生活に照らし合わせることで、考えを広め深めて表現に活かす。
- ・俳句作りや「私のモノ語り」を書くことに関連して、創作することや調査することの意義を学習し、多様な表現の可能性にふれ、より自分らしい表現を探る。
- ・表現にかかわる、必要な知識を身につける。
- ・以上の内容を、主として講義を通して学習するが、課題に応じて、グループ学習や調べ学習、レポート作成などを実施する予定である。

III 副教材・参考書

- ・必ず国語辞典を用意すること。
- ・参考書に関しては適宜授業で紹介する場合もあるが、特に用意する必要はない。

IV 評価の視点・考査について

- ・評価は、出席状況や授業への取り組み状況（関心・意欲・態度）、発言や提言（思考・判断）定期考査や小テストなどを総合的に判断して行う。
- ・定期考査は、期末考査をそれぞれ 100 点満点で行う。
- ・小テストの得点は定期考査の結果に加算する。
- ・グループ学習による発表学習については、担当教員の評価のほか、生徒相互による評価も行い、担当教員が実際の評価を決める際の資料として活用する。
- ・各学習のまとめ段階では、自己評価や相互評価も活用する予定である。

評 価 の 観 点 及 び 内 容		評 価 方 法
関心・意欲・態度	・表現に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、すすんで表現したりするとともに、伝え合おうとしているか。 ・課題に積極的に取り組み、また、人の発言をよく聞くとともに、自分の考えを発言しようとしているか。	・授業への出席状況 ・取り組み態度 ・発言の意欲とその内容 ・ノート点検 ・自己評価と相互評価
話す・聞く能力	・積極的に「話すこと・聞くこと」の学習に取り組んでいるか。 ・自分の考えをまとめたり深めたりして、目的や場面に応じ、筋道を立てて効果的に話したり的確に聞き取ったりすることができるか。 ・「ディベート」「プレゼンテーション」といった活動に参加し、決められた役割をこなして成果をあげることができるか。	・取り組み態度 ・定期考査 ・発言の仕方や内容 ・レポート ・音読や朗読など ・自己評価と相互評価
書く能力	・積極的に「書くこと」の学習に取り組んでいるか。 ・自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じ、筋道を立てて適切に文章を書くことができるか。 ・「小論文」「俳句作り」「私のモノ語り」といった課題を完成することができるか。	・取り組み態度 ・定期考査 ・ノート点検 ・作業プリント ・レポート ・発表方法や資料の表現方法 ・自己評価と相互評価
読む能力	・積極的に「読むこと」の学習に取り組んでいるか。 ・自分の考えを深めたり発展させたりしながら、目的に応じてさまざまな文章を的確に読み取ったり読書に親しんだりすることができるか。	・定期考査 ・小テスト ・音読や発言 ・ノート点検 ・自己評価と相互評価
知識	・表現に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身につけることができるか。 ・特に、漢字や語句に対する理解を広げることができるか。	・定期考査 ・小テスト ・ノート点検 ・自己評価と相互評価

VII 授業計画

期	月	章	教材・考査等	学習内容	着眼点
1	4 5	1 小論文入門	① つなげることば1—接続表現 ② つなげることば2—指示表現 ③ 紙上ディベート ④ 文章の「型」—構成の方法 ⑤ 構成ノート ⑥ 要約の方法 ⑦ 文章のリフォーム—推敲 ⑧ 発展トレーニング	・接続表現に着目することで文章の構造への理解を深め、あわせて自覚的な使用を心がける。 ・指示表現に着目することで文章の論理展開を的確に理解し、また明確な使用が論理的文章には必要であることを理解する。 ・異論や反論を想定した意見提示の方法として紙上ディベートを行い、防衛力のある論理展開の仕方を学ぶ。 ・文章構成のバリエーションを学ぶとともに、特に小論文の「型」としての三段構成の特徴を理解する。 ・文章執筆のための設計図としての「構成ノート」の実際を理解し、実際に作成することで、小論文執筆の準備の仕方を学ぶ。 ・文章要約の際の基本的な観点を理解し、実際に要約文を書くトレーニングを通して、的確な読解力と適切な表現力を身につける。 ・書き上げた文章を推敲するときの観点を具体的に学び、典型的な悪文について理解を深めることで、他者に理解されやすい書き方を学ぶ。 ・本章で学んだ各観点を生かしながら教材文を読むことで、より文章内容への理解を深め、実際的小論文執筆に役立てる。	・論理的な文章を読み、書く学習活動を通して、より広く、文章における説得力の条件を自覚し効果的な表現力を身につけ、論理的な思考力を養おう。 ・つなぎことばを正しく身につけ、それを生かして文章の読解・作文の方法に習熟しよう。 ・紙上ディベートで、意見提示と、あらかじめ異論・反論を予想することを通して、より強固な論理構築の方法を身につけよう。 ・構成ノートの活用や要約・推敲の習熟などで、自分の思考をまとめ、意見を整理して、表現する方法を身につけよう。 ・小論文を執筆するのに必要な基本を身につけよう。 ・実際に与えられたテーマに基づいて、一連の経過・作業を実行し、清書までしよう。

1	5	2 話すこと・ 聞くこと入門	① 発音の基本 ② 音読・朗読の 方法 ③ スピーチの方 法 ④ 聞くこと入門 ⑤ インタビュー の方法	・話すことにおける発音・発声の重要性を理解し、滑舌訓練や早口ことばに取り組むことによってわかりやすい発音・発声に心がけることができる。 ・文の構造を理解し、その意味を伝える音読の方法、特に声の高低や間の取り方の工夫について学び、実際に子どもを相手にしての「絵本の読み聞かせ」に取り組む。 ・スピーチのための事前準備の方法について理解し、実際に「私の勤める……」というスピーチに取り組む。 ・音声言語コミュニケーションにおける「聞くことの力」を認識し、聞くときのマナーを確認する。更に自らの意見形成のためにマッピング・メモを取りながら聞くことの方法や技術を習得する。 ・インタビューが双方向対話型のコミュニケーションであることを確認し、インタビューの一連の流れや効き方技術を学習し、実際にインタビューに取り組む。	・話し手と聞き手との対面的なコミュニケーションを、より社会的な場面で確実に達成するための表現力と、技術・知識を身につけよう。 ・言語活動の最も基本となる発音から発声・朗読・スピーチ・インタビューと、さまざまな方法と技術を知り、総合的に話す力を向上させよう。 ・話すことと聞くことの不可分性に注目し、よりの確な話す・聞く方法を身につけ、ルールとマナーを守りながら、対話の大切さを知ろう。 ・準備を充分に行い、実際に話す場面で意識的に実行してみよう。また、聞く人に配慮した話し方や話す人に配慮した効き方ができたかを、相互で検証しよう。
	6			・メディアの概念や特性を理解するとともに、自分の生活におけるメディアのかかわりに興味・関心をもつ。 ・メディアの歴史を理解し、自分の家族の「メディア生活史」を作成することによって、我々の生活とメディアの関係について理解する。	・メディアについての理解を深め、現代社会におけるメディアの役割について正しく理解しよう。 ・身の回りのメディアに注目し、自分自身の体験から、自覚的に観察・記録・反省する態度を身につけよう。

1		4 私たちの句集作り	① 俳句を作ろう ② 句集を作ろう	- 俳句が難しい文芸ではなく、誰でも参加可能な創作行為であることを理解する。 - 俳句の句法を知り、自己のきりとしたイメージを一つの作品として完成させる過程を学び、集団で句集を作るおもしろさにふれる。	- 言語活動には、娯乐的・創作的な役割もあることを知り、俳句を実作することで、言語の豊かさ多様さに関心を持ち、言語の背景にある文化・社会・歴史にも目を向けよう。 - 俳句の実作を通して、季語の持つ季節感や定型表現・約束事の意味などを考えよう。 - パーソナル・コンピュータや携帯電話を利用し、句集作りを楽しみながら、現代社会における広い意味での表現の可能性も考えてみよう。
	7	ツールボックス	一、考えるために書く 二、聴くという行為 三、「人間と動物」という二分法との訣別 四、「家族の世紀」を超えて 五、地球環境への処方 六、地下足袋 七、インターネット的——孤独と孤独のつながり	- 各文章をよく読み、各ステージの各章と関連させて理解を深め、自らの表現活動に生かす。 - 各文章の表現上の特徴を指摘し、発想や問題提起のおもしろさを理解する。	さまざまな文章を読み、自分の発想や表現の工夫に役立てよう。
				.	.

9	5 小論文の技術	① 意見を論理的に述べる ② テーマ型小論文の実際—新聞について ③ 課題文を読んで書く ④ 課題文型小論文の実際—エネルギー危機は起こらない ⑤ 発展トレーニング かんじんなことは、目に見えない？ ⑥ データを読む ⑦ データ型小論文の実際 ⑧ 発展トレーニング 一、ダイオキシンに関する資料 二、教育に関する資料 三、調べて書く	・小論文は根拠に支えられた意見を述べるものであることを理解し、具体的なトレーニングを通して意見と根拠を短文で書く。 ・与えられた論題から適切な問いを見つける方法を学ぶ。 ・テーマ型小論文の特徴を知り、「問い」と「答え」と「根拠」に着目しながら実際に執筆する。 ・課題文型小論文の特徴を知り、設問の要求を的確に読み分けることや、課題文の要約、引用の仕方などに習熟する。 ・加藤尚武氏の課題文を読んでから書く小論文を実際に執筆する。また、課題文型もテーマ文型と同様、明確な意見提示と、十分な根拠によって展開することを学ぶ。 ・本書で学んだ観点や方法を生かしながら、課題文を読んで小論文を執筆する。 ・グラフや表などのデータの読み方を理解する。またその際の留意事項を知り、実際の執筆に役立てる。 ・データから読みとれた内容が実際の小論文ではどのように展開されているかを理解する。 ・発展的なトレーニングとして、実際にデータ型の小論文を執筆する。 ・更に、一定の調査・情報収集を経てから、レポートなどを書く。	・進路や社会に出てからも要求されることの多いさまざまなタイプの小論文について、実際に執筆することをとめないながら、細かく確実に身につけよう。また、短時間でそれらの作業や執筆が可能になるように積極的に訓練しよう。 ・与えられたテーマについて自分の考えや見聞した事実をもとに意見をまとめ、実際に小論文を書いてみよう。 ・統計資料やデータなどの読みとりを通して意見をまとめ、実際に小論文を書いてみよう。 ・与えられたテーマに関して自分で調べて意見をまとめ、実際に小論文を書いてみよう。 ・実践的な論理的な思考法を体得して、留意事項をふまえて小論文を書けるようにしよう。
---	----------	--	---	---

10	6 話し合いの技術	① 目的に合わせた話し合い ② 合意形成のための会議 ③ ディベートの方法1 ④ ディベートの方法2	・身近な話し合いの場がどのような目的をもって行われているかについて意識し、その目的のためにどのような工夫がなされているかについて考える。 ・合意形成のための会議における効率の良い原案作り、発想法としての「ブレインストーミング」、「Tの字マトリックス」などについて学ぶ。 ・合意形成のための会議における議案書の重要性を確認し、実際の会議における原案や対案の取り扱いの方法について学習する。 ・ディベートのプロセスと鉄則について確認し、論題についての調査結果から立案していく方法を学ぶ。 ・ディベートの実際の流れにそって、ディベートにおけることばや発音の技術を学び、実際にディベートに取り組む。	・一定の公的な集団における話し合いを体験することで、発想を豊かにするブレインストーミング、問題解決のための会議の在り方、議論の仕方をルール化したディベートを通して、その方法を習得しよう。 ・集団の中で発声するさまざまな問題を、話し合いで解決することこそ平和な社会が成立する基本・前提でありながら、その実際にはなかなか難しい場合も多いことから、確実な話し合いの技術を身につけ、ルールとマナーを守りながら相手に配慮した、理想的な方法を身につけよう。 ・ディベートを実際にすることで実感的に技術を習得し、また、テーマを通して国際的な言語問題についても目を向けよう。 ・こうした学習を通して、発展的な音声言語表現を身につけると同時に、未来的な話し合いの在り方についても模索しよう。
11	7 メディアのリテラシー	① 広告というメディアを読む ② メディアのリテラシー	・広告におけるAIDMAの法則について理解する。 ・実際の広告を分析し、どのような表現の工夫がなされているかについて調べる。 ・架空の広告を作り相互批評する。 ・メディアのリテラシーとはどのようなことなのかについて考える。 ・情報読解コンテスト、情報発信者の責任について学習する。	・広告を題材に、批評や制作を通して、メディアのリテラシーを学ぼう。また、インターネットのウェブページの読み取り活動を通じてメディアの特性を知ろう。 ・マスメディアの流す情報の受容のされ方を考えることで、コンテキストの重要性に気づこう。 ・現代社会の情報は、受信者があるときは発信者となる双方向性が強いので、発信者としての責任を考えることで、受信者としての自分を守るという考え方を理解しよう。 ・実際の広告には、どのような表現上の工夫がされていて、それがどのような効果を上げているかを分析することで、広告の本質を知ろう。 ・実生活におけるメディアとの接触において、この学習が活用できるようにしよう。

11	8 私のモノ語り	① モノ語りとはどんなものか ② 私のモノ語りを書く	・ 柏木博の文章を読み、日頃意識せずに使っているモノに注目し、モノには誕生の背景があることを理解する。 ・ モノ語りを書くためには、題材の決定、資料の調査が不可欠であることを理解し、「モノ語り作成手順」に従い、私のモノ語りを完成する。	・ 現代的な消費社会の象徴でもある身近なモノを対象とすることで、どんなささやかなモノにも歴史的・社会的・文化的な背景があることを知り、モノに囲まれた現代の生活を再認識しよう。また、そうするためにはモノに対して、観察・調査・体験が必要なのでありこうした態度も身につけよう。 ・ 「モノ語り」に関しては、題材の決定から、資料探索、作品化まで意欲的に取り組み、この学習が「モノ」を対象にしながら、実は自分自身を語ることになるということを知ろう。
12	ツールボックス	一、説得のための五つの論法 二、ディベートと「テレビ政治」 三、多数決と全員一致 四、目的に合わせた話し合いの形態 五、本とコンピュータ 六、小論文テーマ例一覧	・ 各文章をよく読み、各ステージの各章と関連させて理解を深め、自らの表現活動に生かす。 ・ 小論文テーマ例一覧にあるテーマで実際に小論文を書いてみる。	・ さまざまな文章を読み、自分の発想や表現の工夫に役立てよう。 ・ 小論文テーマ例一覧を活用し、小論文の書き方に慣れよう。
1	9 論文作成法	① 論文作成の準備 ② 論文作成の実際——コンビニエンスストアの過去・現在・未来 ③ 論文の仕上げ——引用と執筆	・ 論文作成の手順を知り、執筆以前の過程を具体的に理解する。 ・ テーマの仮設から資料収集、分析、そしてアウトラインの作成に至る各作業の留意点について理解する。 ・ 引用のルールやマナーについて理解し、注や参考文献一覧といった論文にとっての必要事項について習熟する。	・ 自分自身の問題意識を確認した上で、自由にテーマを設定して論文を書こう。 ・ テーマの仮設から、データ収集と分析、アウトラインの作成、仕上げという一連の作業を持続的・計画的にやり遂げよう。

3	1	10 プレゼンテーションの方法	① プレゼンテーション入門 ② プレゼンテーションの実際 ③ プレゼンテーションの技術	・プレゼンテーションの流れについて理解し、説得力のある話し方の技術について学習する。 ・自分広告を作って相互批評する。 ・対面コミュニケーションとしてのプレゼンテーションの実際について学び、全体の構成の方法や効果的な話し方の技術を習得する。 ・総合的な音声言語表現であるプレゼンテーションの表現要素、評価の観点、情報の視覚化の技術について学習する。	・音声表現でありながら音声表現にとどまらず、身体表現や非言語コミュニケーションなどまでを総動員して、説得力を高める必要のあるプレゼンテーションにとって、最も基本となるのは話を聞いてくれる人の立場を考えることだと気づこう。 ・プレゼンテーションを通して、コミュニケーションの技術や意義に対する理解を深めよう。 ・効果的な話し方、情報の視覚化などまで配慮したプレゼンテーションを実際に体験してみよう。
	2	表現技術のサンプル	① イベントの企画から実行まで ② 表現技術のアンサンプル	・イベントを実行することを想定して、企画会議を開く段階から、イベント当日、更には事後処理の段階に至るまでに必要とされる表現技術のポイントについて学習する。 ・広報や渉外活動におけるメディア選択の観点について考察することで、表現とメディアの関係について学習する。 ・イベント開催の流れを振り返り、話す・聞く・書く・読むという表現の技術と人間のコミュニケーション行為との関係について考察を深め、その結果を小論文にまとめる。	・イベントに関する課題を通じて、社会的な活動への関心を高めよう。 ・イベント開催に必要なさまざまな表現の技術について、理解を深めよう。 ・表現の技術と人間のコミュニケーション行為について、自分の考えを小論文にまとめよう。
		ツールボックス	一、敬語と待遇表現 二、電話のかけ方（インタビューの依頼） 三、通信文の書き方 四、エントリーシートと面接 五、面接の形式と過程 六、「私の作品集」を作る	・コミュニケーションのルールを理解し、実際のコミュニケーションに生かす。 ・電話、通信文、エントリーシート、面接などについて学習することで、実用的なコミュニケーションの技術を高める。 ・本教科書における表現活動の総まとめとして、自分の作品を「私の作品集」という一冊の本にまとめる。	・日常的なコミュニケーションに必要な基礎知識を理解し、自分の自分らしい表現に生かそう。 ・この一年間の成果を「私の作品集」にまとめ、国語表現Ⅱの学習をしっかり確認しよう。